



なかぞね 3 いせき はくつちょうさ  
**中埜Ⅲ遺跡発掘調査**

**はじめに**

いわてけんけんぐんすみたちょうかみありすあざなかぞね

中埜Ⅲ遺跡は岩手県気仙郡住田町上有住字中埜地内に所在する遺跡です。工場建設に関連して、4月から遺跡の一部を発掘調査してきました。  
本日はその成果をご覧くださいと思います。

調査機関：(公財) 岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター  
 調査面積：3,570 m<sup>2</sup>

**発掘調査で見つかったもの**

**遺構**

たてあなじゆうきよ 縦穴住居	11 棟
ほったてばしらたても 掘立柱建物	45 棟以上
その他の柱穴	100 個以上
お墓と考えられる土坑	40 基
その他の土坑	170 基
埋設土器	3 個
焼土遺構	4 基
おとしあな 陥し穴	36 基

**遺物**

縄文土器 コンテナ 50 箱分  
 石器 コンテナ 450 箱分

**※特徴的な遺物**

石棒・石剣 30 点以上 (全て破片)  
 石冠、独鈷石などの石製品各 1～2 点  
 土偶 (破片) 9 点

など



縦穴住居から出土した石剣

※遺構、遺物ともに時期は縄文時代後期から晩期です。また遺構・遺物の数は9月中旬までの集計です。

**発掘調査からわかったこと**

**その1**

調査した範囲のほぼ中央から、大型の縦穴住居(?) 1棟が見つかりました(裏面写真参照)。この遺構は一部壊されていますが、直径 8.4m の円形であったと推測されます。床面には柱穴が 10 個以上ありますが、どれも径 50cm 以上、深さ 150cm 以上と非常に大きいのが特徴です。また南側の壁際には石が列状に並べられています。このように、通常の縦穴住居とは様子が異なるため、はたして人が住むための「住居」だったのか、検討が必要と考えています。

**その2**

4本柱の掘立柱建物(大きさ 3～4.5m) が推定で 45 棟以上見つっています。これらの掘立柱建物群は、調査した範囲の北側から中央に集中して分布し、また大型の縦穴住居を囲んでいるようにも見えます。柱穴の大きさは径 50cm、深さ 50cm 以上と大きいです。また埋土に大量の石が詰め込まれた柱穴が多く、建物廃絶後に故意に柱が抜かれ、石や土で埋められた可能性が高いです。

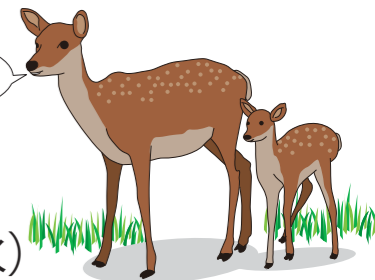
なお大型の縦穴住居と掘立柱建物の時期は、出土遺物から縄文時代後期後葉から晩期前葉頃(約 3,300～3,000 年前頃)と考えています。



掘立柱建物

げんちこうかい  
**現地公開**

ようこそ



令和6年9月25日(水)

**その3**

円形の縦穴住居 10 棟が見つかりました。大型の縦穴住居や掘立柱建物よりも新しい時期(縄文時代晩期後葉。約 2,800 年前)の住居と考えています。床面のほぼ中央には石囲炉(火をたく場所を石で囲んだ囲炉裏)がつきます。



縄文時代晩期の縦穴住居

**その4**

掘立柱建物や縦穴住居の周辺から、たくさんの土坑が見つかり、なかには「縄文人のお墓」と考えられる土坑を 40 基確認しました。

残念ながら「お墓」からは人骨は見つかりませんが、葬る際に一緒に埋めたと考えられる縄文土器などが出土しています。



お墓と考える土坑と出土した縄文土器

**その5**

土器をそのまま地面に埋めた「埋設土器」が 3 個見つっています。埋められた土器は、高さ 40cm 以上の大きな深鉢形土器が選ばれています。何故土器を埋めたのかは謎です。



埋設土器

**その6**

石器の出土量が膨大で、今回の発掘調査の大きな成果の一つとなっています。

なかでも石棒や石剣(←武器ではありません)が 30 点以上見つかり、他にも石冠、独鈷石などの珍しい石製品が出土しています。

**その7**

陥し穴が多数見つかりました。陥し穴は形が「楕円形」と「溝状」の2種類あり、楕円形は縄文時代前期、溝状は縄文時代中期(?)に作られたと推測します。

**◆今回の発掘調査の成果から◆**

今回の調査で中埜Ⅲ遺跡が、古くは縄文時代前期から縄文人による生活の場であったことが分かりました。

特に縄文時代後期後葉～晩期前葉には大型の縦穴住居と 45 棟を超える掘立柱建物群とが、また晩期後葉には 10 棟の縦穴住居が遺跡全体に広がり、たくさんの縄文人がこの地で暮らしていたことがうかがえます。

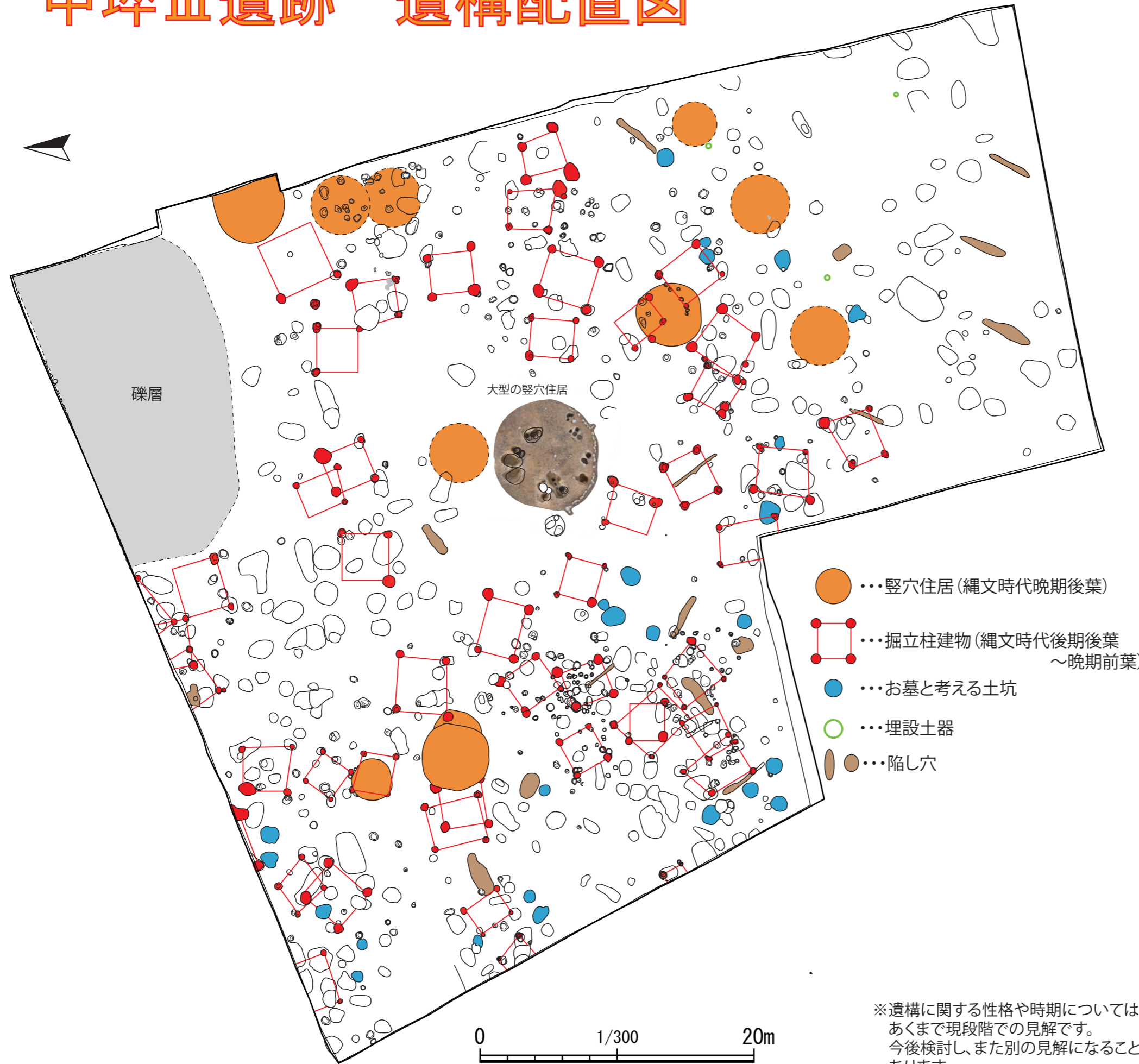
実は縄文時代の掘立柱建物がたくさん見つかる遺跡は、岩手県内では珍しく、貴重な発見でした。また 30 点以上の石棒、石剣や、珍しい石製品が複数出土していることは、中埜Ⅲ遺跡が特殊な集落だった可能性を秘めています。中埜Ⅲ遺跡がどのような遺跡か、今後も検討していく必要があります。



陥し穴(楕円形・溝状)



# 中塚Ⅲ遺跡 遺構配置図



※遺構に関する性格や時期については、あくまで現段階での見解です。今後検討し、また別の見解になることもあります。



調査範囲のほぼ中央から見つかった大型の竪穴住居です。残念ながら、写真下側は後世の削平により壊されていますが、推定で直径8.4mの大きさだったと考えます。

床面から柱穴を10箇所確認しましたが、どれも数回にわたり、柱を立て直している形跡があります。またどの柱も径50cm以上、深さも150cm以上と、非常に大きいのが特徴です。

床面の中央には地床炉があり、火を焚いていたことがうかがえます。



大型の竪穴住居の南壁にみられる石列です。石はほぼ全て住居の内側に傾いています。

この石列を観察した結果、住居の壁を壊して並べられていることが分かり、したがって竪穴住居を使用しなくなった後に、わざわざ石を並べたのではないかと考えています(まだ検討中です)。

なお使われている石は気仙川などの周囲にある川から持ち込まれた石でした。